

第十章 君を探して

夕暮れ時を待って買い物に出る。

日中だとお巡りさんに呼び止められるためだ。

今日は駅前に参考書を買に行く。優奈を正しい意味で心配させないための努力だ。

「……？」

広い通り、人込みのざわつきに目がいった。何か事件でもあったのだろうかと思ふと遠巻きに伺うと、見知った制服姿の子が歩行者を押しつけるように走るのが見えた。

その歩みは遅いんだけど、何を慌てているのか手足を不格好にばたつかせるせいで周りが大きく躲けてしまい、そのせいで目立っていた。

「なんだ？　ありや筒井じゃないか？」

尋常ではない彼の挙動に和正は遠巻きにしてやり過ごそうとした。

「！？」

だが、それよりも先に彼が和正に気付いたらしく、目を丸くさせる。そして踵を返すとまた手足をばたつかせて走る。

「……？」

自分を見て逃げ去る文雄に逆に不審を感じた和正は自転車を走らせる。

「おい、待て！　なんで俺を見て逃げた！」

水泳部とはいえオフの日は体力づくりランニングをしている和正と、運動らしい運動は体育か掃除の押し付け以外にない文雄。しかもズボンがダブダブで前が開いていることもあって走れない。

「くるな！　くるな！　わあ、僕は！　僕はなにも！」

自転車が入れないのを見越して路地裏に逃げるが、逆に好都合。誰かに邪魔をされずに和正は一気に距離を詰め、そのまま背中を押さえつける。

「言え、なんで逃げた！？　やましいことがないなら逃げる必要無いよな？」

「なんでもない、僕は、なにもしてないんだ！　わるくない、ぜんぶあいづらが……」
ワイシャツやズボンに埃や汚れが見える。ズボンはボタンが外れていて、ベルトも外れている。その様子から浩司にでも虐められて裸にでもされたのかと想像する。

そしてあの青臭い臭い。忘れたい午後、シャワールームとチア部の部室で嗅いだ匂いが汗に混じって微かにした。

「お前……何したんだ……？　まさか」

もう一度ズボンに目をやる。汚れに見えたそれは白い濁り汁の染み。それが青臭さを放っていた。

「おい、なんだこれは？　学校で夢精したとでも言う気かよ？　なあ、どういふことなんだ？　わかるように答える？」

「……ちがうんだ、浩司達が無理やりさせられたんだ。僕は悪くない。警察に行くって言

うから、あのヤリマンのじごうじと……ぶぐ！」

訊問の最中、腕を叩かれる。はっと気づいて腕の先を見ると、きつく締め上げていた。慌てて放すと、無様に尻餅を着く。

「はあはあ……なにするんだ……乱暴な奴だ……君は……うげえ……！」

興奮と全力疾走、酸素が足りない中で首を絞められたことで胃の中がでんぐりがえりし、嘔吐していた。

「……」

やり過ぎたと思うも、それどころではない。文雄の呟くキーワードと自分を見て逃げたこと。それから類推されるのは、大切なアイツの……。

「畜生、俺は馬鹿だ！　なんて間抜けなんだ！」

叫び、同時に走り出す。通りに飛び出て自転車に飛び乗る。車道を逆走して引き返す。クラクションを鳴らされたら心の中で土下座する。とにかく今は……。

校庭では運動部が練習をしている。屋上では吹奏楽部が演奏しており、文化部の活動が行われているのか、校舎にまばらに明かりが見える。

私服で校内へ入るのは目立つ。下校途中の子は汗びっしりよりで目を血走らせる和正を遠巻きにしていた。

「路校舎に向かおうとした時、赤い車がききつと止まる。」

「こら！　私服で校舎に入るんじゃない！　田所じゃないか！　お前は停学中だろ、大人しく謹慎している！」

窓を少しだけ開けて怒鳴りつけるのは杉田だった。面倒な奴に掴まったと感じた。だが車はエンジンがつきっぱなし。降りる素振りも見せず、言いたいことを言い終えると、そのまま走って校門を出て行った。

「……なんだ？　あいつ……、いや、それよりも……」

足止めされなかったことに安堵し、和正は校舎へ走る。

「……おい、君、誰だ！　勝手に入っちゃいかん！」

私服姿のせいですれ違う教員に声を掛けられる。他にも汗まみれで、鬼気迫る顔付で走っていることも相成って、騒然とさせる。

「すみません！　後にしてください……！」

「そうはいくか！　待ちなさい……！」

男性教員がしつこく追ってくる。

「うわっと！」

「あぶねーなって、……和正？ じゃないか」

二階へ駆け上がったところでバケツを持った芳雄と春子に会う。

「お前、私服で。停学だったんじゃないか？」

「すまん、話は後だ。優奈を見なかったか？」

「市川さん？ 市川さんなら視聴覚室の掃除……」

「そうか。ありがと！」

「おい待て、和正、上着貸せ」

「？ なんだよ、急いでるんだよ」

「いいから、早くしろ。急がば回れだ」

階下で息を切らせながら上がって来る教員。芳雄は半ば強引に上着を交換すると、和正を促す。

「……??？」

教員が上がってきたところで、芳雄はこれ見よがしに上着を広げて反対側へ走っていく。

「おい、部外者が……入って来なかったか？」

「……先生！ なんか私服を来た人があつちに走って行きました」

春子は芳雄の走った先を指差して教員を誘導する。その裏で和正に上へ行くように顎で示す。

「……」

こっそり階段を上がり、教員が芳雄を追いかけたところで駆け出した……。

視聴覚室へ向かうも、そこには誰も居なかった。

机は並べられており、掃除は終わっているかのように見えた。だが、カーテンの揺れがそれを否定する。窓は開いたままで、逆向きになっている机がいくつかある。その不審な場所の中央には、夏の暑さでも粘り強くこびりつくものがあった。

「……!!!」

痕跡から全てを決めつけるのは早急だろうか？

掃除当番は文雄と優奈と他の誰か。

取り乱して逃げた文雄は和正を見てうろたえ、ヤリマンと訴えた。

その視聴覚室では、男の欲望の残滓。

窓を開けていたのは、きつと残り香を誤魔化す為。

「優奈は……!!!」

はっと気づいて立ち上がる。

そんなことより優奈だ。彼女はどこにいるのだろうか？ ここで行われていたことが想像通りなら？ 隠匿されているのなら誰かに連れていかれた？

脱兎のごとく、教室を出る。

どこに居るのだろうか？

体育館裏、部室棟、柔剣道場、音楽室、視聴覚室、各階のトイレ……。

思いつく場所を駆けずり回って行きつく先は、昇降口。優奈の下駄箱を覗くと、彼女の靴が無かった。

「……外か？ 家か？」

上履きのまま行きそうになり、慌てて靴を掴む。履き替える時間も惜しいとそのまま両手に掴み、とにかく走った。

優奈の家へ行き、ドアを叩く。インターフォンを押し直してしばらく待ち、また叩く。

「……なんですか？ 警察を呼びますよ」

「おばさん、優奈は！？ 優奈はいるの！？」

ドア越しに聞こえる優奈の母の質問に答えず、和正は一方的に捲し立てる。

「……優奈は……今日は学校に行ってるはずだけ……」

「まだ帰ってないの？」

「……何かあったの？」

「何も無かったら来ないよ！ 教えてください、優奈は帰ってないんですか！？」

「……まだ帰ってないけど……」

動揺を見せ、ぼそりと呟く優奈の母。和正は目をぎゅつと瞑ると、踵を返す。ここで押し問答をされていて警察を呼ばれても時間だけ取られる。和正はまたもやみくもに走り出した。

——どこだ、優奈！ どこに居るんだ！ なあ、教えてくれよ。何が……あったんだよ……
…優奈、お願いだから、出てきてくれよ……。

小さな村とはいえ、人一人隠れるには十分の大きさがある。

ゼミ、市民プール、神社、再び鬼瓦第二校、駅前、自宅……。

どこにも居ない。どこにも……。

「……優奈、どこに……」

気力だけで駆け回る和正の額からは汗が滝のように垂れていた。

吐き気を催すほどの疲労感と、絶望感。そして後悔。

どうして優奈を一人にさせたのだろう。彼女を守ると決めたのに。

悪い奴らから、酷い奴らから彼女を守らなければならないのに……。

「優奈……おれ……俺はバカだ……。どうしようもない馬鹿だ……」

最期に辿り着いたのは鬼瓦高原公園の高台。センチメンタルな自分を嗤いつつ、もうそこしか思いつかなかった。

「……優奈！」

高台にあるベンチに人影が見えた。白いブラウスは鬼瓦第二校の夏服だろうか？ とにかく走った。

「……え？ あの……」

駆け寄って来た和正にその子は驚いたような顔で後ずさりする。

「あ……すまん、人違いだった……」

「はい……」

ショートカットの子に見覚えは無い。よく見ればブラウスも全然違った。彼女は誰だろう。どうでもいい。

疲労困憊な和正はそのままベンチに倒れ込む。先客は居心地悪そうに席を立った。

悪い事をした。けれど、このままどこへ行けというのか？ もう立ち上がる気力もない。それでも優奈を探さなければという気持ち焦らせる。

「くそ、待ってるよ、ゆうな……俺が、絶対に、お前のこと……見つけるから……そうしたら、きつと、お前のこと、守ってやる……絶対に……俺が……」

絶え絶えの息はかすれごえになり、ヒューヒュー言っていた。

「……優奈……俺は……」

汗なのか涙なのか、視界が歪む。

西の空が赤く歪む。

少し休んだら、そうしたら涼しくなるから、また探しに行く。どこだろう。地図をしらみつぶしにでもして、必ず見つける……。

「優奈、優奈……」

遠くで車の音がする。

空は暗くなり始めていた。

もう夏も終わり。

それでも残暑が神経を苛立たせる。

休んだせいで疲労がどっと押し寄せる。汗で身体も冷えてしまい、節々も痛む。

時間だけが無情に過ぎ、思い出の場所を頼るも、結局は独り相撲。

「優奈……どこいるんだよ……。優奈……お願いだ。出てきてくれよ……頼むよ。会いた
いよ、優奈……」

涙がにじむ。悔しく、情けない。こんな姿、誰にも見せられない。けれど、今は誰も居ない。居たとしてもどうでもいい。もう失えるモノすらないのだ。

「優奈！ ゆうな……」

涙混じりに叫び、腕で目を擦る。汗と涙が混じる。とめどなく溢れ、はながぐずぐずい
いだす。

「……呼んだ？」

「ゆうな！」

聞き覚えのあるソプラノの声。少し冗談めかしたしり上がりで、くすつと笑いが含まれて……。

「優奈！」

起き上がり声の方を見る。歪んだ視界の中でもそのシルエットはわかる。優奈だ。

「優奈！！」

叫び、立ち上がり、抱きしめる。強く、その感触を確かめるように……。

「優奈、俺、探したんだ。ずっと、ずっと……。村をさ、一周して、鬼瓦校内だって隅から隅まで全部……。どこにもいなくて、もうどうしたら良いのかわかんなくて、だからここに来たんだ。もし、優奈も同じ気持ちでいてくれたらって、そんな馬鹿みたいなこと考えてさ……。俺ってナルシストなのかな……。でも、もう、ここしか……。無くて……。」

捲し立て、鼻をすすりながら告げる。

強く抱きしめて感じる体温。温かくて、しっとりとして、ふんわりと甘い香り。いつもと違うシャンプールの匂いに汗の匂いは誤魔化されている。

苦しいかもしれない。力強く抱きしめているから。それでも彼女は許してくれる。同じ気持ちなら嬉しいけれど……。

「和正君、男の子が泣いちゃダメだよ」

彼女も抱きしめてくれる。二の腕の柔らかな腕力が後頭部を引き寄せる。頬が触れあい、温かさが伝わり合う。

「ごめん、でも……。俺……。」

格好悪い。優奈の前で泣いたのはいつ以来だろう。ずっと昔、彼女を守るために喧嘩して、それで怒られて、優奈が泣いて、つられて泣いて、泣いたら泣いただけ相手を不安にさせるとわかったから、だから我慢してきたのに、今は……。

きつと優奈のほうが辛はず。いや、辛い。のに、どうして自分ばかり泣いて、優奈を悲しませるのだろう。いつから自分はそんな弱虫で不甲斐ない奴になったのだろう。

「俺、優奈のこと、守るって、守りたいから、だから、頑張るって決めたのにな……。なにやってんだろ……。ほんと」

「和正君は頑張ってるよ。喧嘩っ早いけどね……。それが心配だよ。私のことになると我を忘れちゃうもん」

「……。」

「喧嘩ばかりしちやダメだよ？ 前に約束したのに……。」

「だって、俺、優奈があいつらにひど……。っ」

言いかけて唇に人差し指。

「やめようよ。もうそんなこと、忘れよ」

「でも……。あいつら……。」

「お願い、忘れたいの」

「……優奈」

「それよりもね？ 和正君ともっと楽しい思い出を作りたいの。聞いたよ。お母さん、和正君に酷い事いってたんだね……。変だなって思ったの。だって急に冷たくなるんだもん。和正君……」

「俺、馬鹿だから……バカだから優奈と同じ道に進めないって思って、だから……」

「だから身を引いたの？ そんなの格好つけなだけ」

「ごめん。謝ったって足りないけど、俺、馬鹿だった。本当にバカだった。本当は諦めるんじゃないめなんだよ。「一緒に、居られるように努力しないとダメなんだよ。じゃないと優奈を守れないんだ」

「そうだよ……。ようやくわかったの？」

「うん」

「うん」

「なあ、優奈、俺、今からでも頑張るから、だから……」

「遅すぎることなんて無いよ。和正君がそのつもりなら、私、一緒に頑張るから……」

「うん。俺……」

「ほら、もう泣かないで。そろそろ帰ろうよ。和正君のお母さんも心配してるよ」

「ふん、ぐず……。わかったよ。わかったから、少し、待ってくれ……。俺」

「うん……。いいよ」

そっと身体を離し、おでこをこつんと触れさせる。上目遣いに和正を見る優奈。

今、泣き顔を見られていると思うと恥ずかしい。視線を逸らし、腕で涙を拭う。鼻をすすり、目を瞑る。

「ふう……」

「和正君……」

目を開けても優奈は見つめたままだった。

意味深に唇を開き、きゅっと結んで何か言いたそうな……。

「優奈……」

口を開くと、少し距離が縮まって、そのままお互いの気持ちの引力でひかれあい……。

「……んっ……ふう……」

柔らかい感触。少し濡れた。涙の味でしょっぱいかもしれない。

「んふ……ふう……ふうん」

そっと目を閉じる優奈。和正も目を閉じると、より鮮明に彼女の柔らかさを感じた。キス。初めての。そういうものだった。

気恥ずかしくて、息苦しくなって唇を離したら、彼女は意「え」と呟いて笑った。

「初めてだよ、キス。和正君の」

「……うっさいな。良いだろ、別に……」

「あ、照れてる……んふふ、カワイイ」

「からかうなよ。ったく、それにキスならしたことあるだろ」

「え？ うそ……」

「ほら、その、むかし、ずっと、昔に優奈がその」

「あ、もしかして、幼稚園で？」

「そうだよ。悪いかよ」

「あ、そっか……そうだったね。そんなことあったもんね……。うふふ、そっか、あれが私と和正君のファーストキスかあ……」

しみじみと呟く優奈だが、すぐにケラケラ笑いだす。幼い、物ごころつくかどうかという年のたまたま唇が触れ合った程度のこと。情愛を確かめ合うようなモノではない。それでも和正の記憶に残る、確かな思い出だった。

「ふふ……あはは……和正君たら、うふふ」

「うっせーな、そんなに笑うなよ」

「だって、嬉しくてさ。そっか。そんなことあったんだなって思ったら、なんかすごく」

「優奈……」

暗がりの中、目頭を擦る優奈は泣いているのかもしれない。

「ほら、早く帰ろ。自転車あったよね。ちゃんと送って行って。じゃないとどっかにいっちゃうかもよ？」

「あ、ああ……うん」

顔は見せまいと先に行く優奈。和正もそれを察して、ゆっくりと歩く。それが逃げなのか、それとも労りなのか、まだよくわからない。とにかく、今は彼女と共に居たいから……。

掛 九郎家……。

拝啓、田所和正様

君の唯一の友達、渡辺芳雄です。残暑見舞いに感謝するように。

冗談はおいといて、お前が別のところ行くようになってから、もう一年経ったな。

そっちの方の暮らしはどうだ？ なんか楽しいことあった？ そりゃあるよな。市川さんと一緒だもん。辛いとかな言ったらぶっとばすからな？

っていうか、この前会ったばっかか……。

色々あったけど、元氣そうでないよりだった。

俺の方は相変わらずかな？

今の時期だとうちみたいいな弱小野球部じゃ暇多いし、やたら掃除当番押し付けられてばっかだよ。なあ、放課後だけ戻って来てくれないか？ 二人じゃ大変なんだよ。

ええと、北村さんなんだけど、お友達のままですようだってさ。

お前のせいなんだから今度なんかおごれよな。

それと、これ、言うべきなのかなって思うんだけど、浩司達、事故ったらしい。

ノーヘル、ニケツ、無免許でなんか改造でエンジンとか排気量？ っていうの？ あれを弄って準中型レベルの原付乗っててさ、工事現場に突っ込んで段差で一回転。自分で自分の乗ってた中型に轢かれちゃったんだって。

浩司の方はなんか顔から落ちたみたいで、アゴとかぐしゃぐしゃでさ、指もなんか親指と小指切断しちゃったんだって。手が下敷きになったっぼい。

最初はざまーって思ったけど、クラス代表して見舞いに行ったらやばかったよ。

なんか大吾が一緒だったみたいなんだけど、いろいろあって停学中。賠償っていうの？ それでかなり揉めてるみたい。

あとさ、筒井の奴も事故ったんだよ。なんか受験ノイローゼっていうの？ 電話がとか警察がとかさ……。お前も市川さんに追いつけて頑張ってるみたいだけど、昆詰めすぎるなよ？

俺は心配されるほど頑張らないし、北村さんに教えてもらうからほどほどだぜ。

あと、先輩……っていうのも嫌なんだけどさ、あの屑どもにも罰が下ったっていうのかな？ まあ、当然つか当然か。野球ができるってってことと人間性は比例しねーもん。

あいつら鬼瓦第二に来る前のところで問題起こしてたんだって。そんでほとぼり冷ます為に俺らんとこ来てたんだって。でも、問題起こしちゃったじゃん。それで推薦とか取り消されてあんなったわけじゃん。でもともと野球しか取り柄内馬鹿だから農業系のガッコしか受け入れ先なかったんだってさ。野球部ないんだぜ、あそこ。

まあ、そんなところであの人たちが大人しくできるわけないじゃん。んで、騒ぎ起こして退学だって。退学まで一緒なんて仲がいいよな。

なんつうか神様ってのは居るもんだな。
やっぱり悪い事はできないよ。

たださ、そういうの見てッと隠し事もさ。良くないよなって思うんだ。
俺さ、本当はお前のこと、怖かったんだ。
学校違かったじゃん？

お前、喧嘩っ早いし、すぐ怒るし。

特に市川さんのこととなるともう手が付けられない。

はは、そんな猛獣なんかと一緒に居られるかよって感じ。

っていうか、緒方なんかは卒業制作でお前にぶん殴られたって言ってたぞ。お前、ほんと喧嘩っ早いな。そりゃ誰も寄り付かねーよ。

で、なんでそんな奴の周りを俺がうるちよろしてたかっていうとき、俺、市川さんのことが好きだったんだ。

お前の友達面してたら市川さんとも仲良くなれる。

将を射んとする者はまず馬を射よ。

そう思ってたんだ。

でも、一緒にいたらお前は良い奴だっと思った。

そして、だから市川さん、お前の事好きなんだなって思った。

夏祭り？ 神社の時に諦めたんだ。

あの頃って市川さん、なんか筒井の事文雄って言うってじゃん？ もしかしてお前の事どうでもよくなってフリーになったかかって思ってたんだ。

けど、やっぱりそうじゃなかった。市川さんにはお前が必要なんだよ。だから、絶対に放すなよ？ 手放したらお前のこと見限るぞ。

はは、なんてな……。

俺も色々話せる友達失いたくないからさ、せいぜい失望させるなよ。

と、いうわけで、奥手な和正きゅんを後押しするために映画のチケットを同封します。

北村さんを誘ったところ、玉砕したために転用させていただきました。

同一映画をご入場時に限り見放題です。退館なされた場合は無効となりますのでご注意ください。

い。なお、映画の感想、当日の様子などいちゃこらした報告は不要です。馬に蹴られてください。

以上。

改めて友人にありたい渡辺芳雄より……。

SNS の時代に古風な封筒が届いたことに和正は身構えていた。

開けてしまえば多少のショックはあったものの、友人の温かさがほのかに伝わるものだった。

複雑な気持ちがある。彼らがしたことは許せるはずも無く、できればこの手でけじめを付けたかった。ただ、それをすればきつと優奈が悲しむ。次に何かをすれば駐在所のお世話になりかねない。

今の自分の手は、ペンを握るためにあり、怒りを握るためではないと自分に言い聞かせて耐えてきた。

湿気った花火の煮え切らない燻りにバケツをひっくり返されたような気持ち。

このことは胸にしまっておく。消せない過去もしまっておける過去である。それなら、楽しい思い出で頭の中を散らかしてしまいたい。

だから今日はこのチケツトをありがたく使わせてもらおうことにした……。

「うふふ、嬉しいな。和正君が映画に誘ってくれるなんてさ」

「芳雄がチケット余ったっていうからさ」

いつもなら相模原自由学園の自習室で隣り合っている頃。けれど、今日はチケットの有効期限に急かされてサボタージュ。

明確に言葉にしたことはないけれど、両想いの二人。共に歩める未来を求めて日々精進している。そんな日々のひと時の休憩。問題があるとすれば、タイトルが怨恨だの呪いだの和風ホラー映画だということ。

きつと暗がりでは怖がる誰かに抱き着かれることを想像してのことだろう。その目論見は外れたわけだが、もしかしたら芳雄が気を遣ったのかもしれない。彼はそういう奴だ。

「なんか怖い映画だね。ちょっと不安」

「ん？ ああ。怖かったら手繋いでやるぞ」

ポップコーンをひとつつかみかじり、和正に向ける。ついでに炭酸ジュースを受け取りごくりと飲み込む。

「んもう、馬鹿！」

暗がりの中、肘で脇腹を突いてくる優奈。上映開始のブザーが鳴り、和正はスクリーンを見る。

映画会社のロゴが流れ、大きな人の目がぎよろりと上下に動いたと思うと、モノクロの旧家屋と立ち尽くす少年。現代のビル群、森の奥深く、井戸、畳の部屋のテレビ、砂嵐の中から手が伸びてきて……。

「……！」

目を見開き背もたれにどんと背中を突きつける優奈。そんな彼女を見て、和正は笑いをおさえられなかった。

「怖いか？」

「怖くないよ」

「震えてんじゃない」

「大丈夫だってば」

「無理して」

「そういう和正君こそ、無駄口が多いんじゃないの？ 怖いのも誤魔化してるとか？」

「まだ始まってすら居ないのに、何を怖がれているんだよ」

「そんなこと言って、怖くないなら絶対最期まで見てよ。最期に答え合わせするから」

「なにもこんな時までそんなこと」

「映画を見てストーリーを理解する。そう言うのも現代文の勉強です」

「はいはい……」

すっかり教師気取りの優奈に乾いた笑いが出てしまう。

「まあ、せっかく芳雄にもらったんだし、最期までは見るさ」

「うん。よろしい」

こうなると優奈は厳しい。もしいい加減な態度で鑑賞すれば、たちどころに詰められる。もし答え合わせを失敗したら、もう一度見て来いと言われるかもしれない。当然次は自費。それだけは何と少しでも避けたいと、和正はスクリーンを睨む。

「ね、もうちょっと真ん中いこっか？」

「ん？ ああ……」

平日昼間、サボリーマンが後ろで寝ているぐらいでほとんど空席。それなら一番見やすそうな中央の席へ行くのがベストだろう。腰を曲げながらごそごそ動き、正面に座る。そろそろ第一の事件が始まって……。

「……」

人が死ぬ。原因はこれだ、いや、あれだ。崇りを鎮めるにはどこそこへいってお供え物をしなければならぬ。お供え物を正しい種類、順番で供えないから祟られた。生贄をださないとだめだ。生贄は十七歳の生娘だ。鳥の血で紅を塗って、浅葱色の着物を左前で着せるのだ……。

謎の事件と謎の解決法、謎のしきたり。全てが謎に尽くされたシナリオに首をかしげてしまふ。

展開も、暗がりによくわからないところを走り回ってたまに女優の顔がアップになって悲鳴を上げる。その唐突な悲鳴に驚かされるが、展開が陳腐で怖くない。

時折白い画面で穏やかな音になるせいで眠気を誘われる。一定のリズムでとんとんとん……。

「……うーん……」

うとうとし始め、カクンと頭が下がる。

「……ね、和正君……」

「ん……なんだ？　ちゃんと見てるぞ……」

「眠そうだけど……あ、つめた……零しちゃった」

「うん、すまん……」

「ちよっとお手洗い行ってくるね。拭かないと染みになっちゃうし」

優奈は小声で言い、席を立つ。

悪いと思いつつ、身体が重くて動けない。気を抜くとストーンと意識が落ちそうになる。

重い臉を手で上げようとしてそのまま背もたれに寄りかかる。同時にスクリーンが一転し

て暗がりに……。それが決めてとなって、和正は深い眠りに落ちた……。

「……うーん、うわ!!」

額に触れる冷たい水滴。思わず顔を振ると、ぱしゃっと水を被る。

「ああもう、急に動くから……」

優奈がジュースを買ってきてくれていて、眠っているとところに悪戯をしたようだった。正直、この映画よりもずっと驚かされた気がする。

「脅かさなくてくれよ……。ありがと」

紙コップを受け取りごくごくと飲む。ぼんやりした思考ながらに、既に物語はクライマックスだろう。おどろおどろしい怪物が主人公達を追いかけている。

途中寝ていたせいでよくわからず、バラエティ番組のコスチュームのような怪物では逆に笑いしか起きない。

隣を見ると意外にも優奈は真剣であり、目をらんらんと輝かせてスクリーンを見ていた。

冷や汗なのか玉のような汗も見える。

「暑い？」

「え？ あうん、もらうね」

紙コップを呷ると氷ごとじゃらっと飲み込み頭をとんとんと叩く。かき氷を食べた時の彼女の癖だ。

「おいおい、ずれてるぞ」

肩紐がずれていることに気付き軽く肩を叩く。

「んもう、そういうことはこっそり言ってよね。和正君のエッチ」

どうもデリカシーが無いらしい。今後は気を付けないと思う頃にはエンドクレジットが流れ始めていた。

「……どうする？ なんか腹減ったし、飯食いたいんだけど」

冷たくなったポップコーンをもしゃもしゃと食べても腹膨れない。水っ腹の中でしゅうしゅうしぼんでいく感じだ。

「出よっか……」

いくら貧乏学生とはいえ二回も見る気になれず、和正は立ち上がり、こそこそと出て行った……。

映画館を出ると既に日も傾き始めていた。普段映画館で見ることのない和正は、思いの他時間が経つのが早いのだと驚いていた。

時計の針もおやつ時間を示しており、どこかでお昼を食べようと周囲を伺う。

映画館前では恐怖を煽る看板があり、その脇でカレーのチェーン店が見えた。

「なあ、カレーでいいか？」

「和正君、あつちで食べようよ。私、おそばが食べたい。」

カレーでもいいかなと思ったところで優奈に袖を引つ張られる。よく見れば彼女の服装は黄色と真逆の淡い色合い。カレーの黄ばみが着いたら目立ちかねない。

「うん、そうしょつか……」

優奈の希望と服を守るためにと領き、向いの通りの寂れたソバ屋へと歩む。すると視界の先を猛スピードで赤い車が走り去るのが見えた。

「うわっと……危ねー……」

悪態をつきそうになって慌てて口を閉じる。口は災いの元。たとえ相手がなんであれ、片っ端から喧嘩を売っても良い事は無い。隣には守るべき人がいるのだ。余計な事をしてはいけない。

「あ、ポスト」

店の前には赤いポストが鎮座していた。

「よいしょっと……」

優奈は鞆から茶色い封筒を取り出すと、ポストに投函していた。

今時郵便配達のような古風なことをするものだなと思いつつ芳雄も似たようなことを思い出す。

彼の気遣いのおかげで今日は優奈と一緒に映画に来られた。素直に感謝したい。

これからもきつと必ず守っていききたい大切なことなのだ。これから思い出を作るためにも、ずつと、きつと……。

「ね、早く早く」

「急ぐなよ」

「そろそろお昼のラストオーダーだってよ」

「まじかよ！」

そんな失敗もきつといつの日か、楽しい思い出に変わるはずだから……。

思い出だけは守るために

完